

第二十話 神秘の奥に潜むもの

いつでしたか、私は皆様に、もしもあなたが、私たちの知らねばならぬ、たった一つのことを謙虚な気持ちで学びたいと望まれるなら、秋の夜空に冷たくまたたく星々が、あなたにそれを教えるでしょうと申しました。

夜空の星々、音なく静かにまたき続ける夜の大空の中に、昔の人々はたくさんさんの夢と神秘を織り込みました。なんとたくさんさんの人たちの魂が、夜の空を仰いで、大空に向かって話しかけ、また、ひとり、深く物思いにふけったことでしたか。けれども、近代科学は、この夜の空から、一枚、また一枚と神秘のペールをはぎ取りました。人類はこの大宇宙を征服し始めたのです。

私たちの母なる大地を、太陽をめぐる九つの遊星の一つとして冷静に理解してから、科学する人類の目は、遠くはるかな天空にはてしなく伸びて行き、神秘をこめた星々の正態を一つずつあばき、夜空を飾る神秘のかわりに、一つ一つの星の大きさ、その構造、その運動などを明確に算

出しました。それは、神秘のかけなどな一つとどめ得ない冷たく明確な物質科学の世界でありました。天の川を周辺とする平べったい、長円形の銀河系宇宙、つまり、私たちの地球が属するこの恒星宇宙は、およそ四百億の太陽からできており、直径は約十光年、すなわち、一秒間に三十万キロメートルを突走る光が、十万年かかって到達するだけの距離を直径とする一つの比較的小さな宇宙であることは、今や自明の事実となりました。更に、この銀河系宇宙の壁を突き破った人間の理知はこのような宇宙が、はてしのない空間の中に無数に存在していることも確かめました。たとえばアンドロメダの大星雲もその一つであります。それは私たちの銀河宇宙に最も近く、およそ六十八万光年の距離に、細長く輝いて見えます。現在、人類の持つ最大の目とも言われる、ウィルソン天文台の百吋望遠鏡で見える限りでは、これらの銀河宇宙は、五億光年のあなたにまで、まんべんなく均一に散在しており、その数もおよそ一億に上ると言われます。

あまりにも私たちの想像を絶するこの恐ろしいほどの大宇宙から、今、逆に、私たちの姿を眺めるなら、一億に上る恒星宇宙の中の、直径十光年の比較的小さな私たちの銀河宇宙、その宇宙の中の四百億の恒星の一つであって、目にもとまらぬような一点に過ぎぬ太陽、その太陽の周囲をめぐる九つの遊星の一つである地球の上になうごめく虚無にも似た二十数億の人類の中の一員、それが、私の姿なのですが、全く虚無にも似たこの人類は、まず月を眺め、太陽を捕え、地

球と兄弟分である太陽の遊星群の存在を明らかにし、更に、この銀河宇宙のなぞの壁を突き破って、はてしない大宇宙の中に、その科学の目を向けたのでした。真に、人間理知の輝かしい勝利に、私たちは圧倒される思いがします。

けれども皆様、こうして、はてしない大宇宙の探究に立ち出でた人間の理知ではありませんが、その人間理知の前に立ちはだかった一つのもののあることをご存じでしょうか？

人間理知は、大宇宙の神秘のベールを一枚一枚はぎ取りながら、その実、一步一步、最後の最大の神秘に近づいて行ったのです。人間理知の天空への探究は、実は、その最後の神秘を見い出さんがための行脚の旅であったと言ってもよいでしょう。では、いったい、その最後の神秘とは何なのでしょう？

今、一緒に、少しばかり、天文学のいうところを聞いてみましょう。

近代天文学の教えるところによりますと、この大宇宙は、始めから今と同じ姿を持っていたものではなくて、徐々に変化して来たもの、また、いまでも変化し続けているものだということは明らかです。その変化というのは、スペクトルの「赤方変位」という現象によって知られるように、すべての銀河宇宙は、お互いに、離れ離れになり、二度と再び相集まる可能性の全くない超スピードで、はてしない空間の中に飛び散りつつあるということです。言い換えれば、約四百億の

太陽でできており直径十万年光年という私たちの銀河宇宙をはじめとする約一億のこれら巨大な恒星宇宙の一つ一つは、ちょうど、恐ろしい速さで四方八方に飛散しつつある、炸裂した爆弾の破片のごときものだと言えましょう。

この最初の炸裂がいつごろ起こったかということは、さまざまな科学的研究によって、およそ、今から二十億ないしは三十億年以前のことと考えられます。ですから、今でこそ五億光年という恐ろしい距離にまで広がっていますが、今から二十億あるいは三十億年以前の大宇宙は、ガモフという学者の説によりますと、その半径がわずかに太陽の直径の八倍位の大きさの球状の、超密度、超温度の中に、ひしめき合っていたということになります。

ひしめき合っていた……と申しましたが、そういう状態は、ちょうど、爆弾に点火されたときの状態と同じで、実は一瞬の状態に過ぎません。そのような状態になった瞬間、それは、大爆発を起こして、現在、私たちが知っているような膨脹する大宇宙となり、ほとんど光の速度にも匹敵するような恐ろしい速さで、四方八方に飛び広がり始めたと思ねばならないのです。

ところで、この巨大な爆弾に点火したものは一体何ものだったのでしょうか？

爆弾自体が、自分自身に点火することができなと同様に、ある物質を、それが炸裂せずにはおれぬような超密度、超温度の中に圧縮するためには、必ず、第三者の力が必要となるのです。

皆様、いつか、静かに、夜の空を仰いでください。きらきらとまたたく無数の星々、ほとんど、それらのすべては、私たちの太陽と同じほどの、いや、太陽のなん百倍、なん千倍、なん百万倍も大きい太陽たちなのです。そして、そのあるものは、地球から、なん千光年、なん万光年の距離にあるのです。そして、ついに、そういう銀河宇宙が望遠鏡で見える限りでも、五億光年のかなたにまで広がっているということを考えてください。この大宇宙のはてしのない広がり、少しでもあなたに理解されるなら、あなたは、思わず、身のすくむような恐怖感に襲われるでしょう。けれど、けれども、たとえ、それがどんなにはてしなかつと、ついに、それは、有限なる世界であり、時間と空間とに限られてある世界なのであって、この広大無辺な大宇宙の背後に、音もなく、静かに天地万物一切をみとり給う無限にして永遠なるものなしには、大宇宙も永遠に虚無であつたということに思い至るとき、あなたは思わず、その無限なるものの前に、ひざまずき合掌したくおなりになりませんか？

ひざまずいてください。そして、そつと手を合わせてみてください。もしもあなたが、この世に生まれ落ちてから今日の日まで、そういう姿を取ったことがおありにならなかつたとするなら、あなたはきつと、不思議な気持ちをお感じになるでしょう。

不思議な気持ち……そうです。それは、なにかしつとりとした、母のひざに抱かれた遠いふる

庄縮という言葉自体が、それを意味しています。さて、人間の理知は、大宇宙の神秘に挑んで、その探究を続け、ついに、現在一億を数える銀河宇宙が五億光年のかなたにまで広がっているこの大宇宙も、今から二十、ないし三十億年以前には、その半径が太陽直径の約八倍位の球状の中に、想像を絶する恐ろしい密度と温度をもって圧縮された一瞬があつたことを知ったとき、実は、その時に、人間理知は、その役目を果たしたのです。今、人間理知に残されたことは、謙虚に認めることです。「然り」と肯定することだけです。ただ一つのものの存在を。

ただ一つのもの、そうです。いかにはてしなかつとも、しよせん限りあるこの大宇宙に、場所と熱と運動のエネルギーを与え、飛び散りながら徐々に冷え行く破片の中に、生物のための美しい団欒の場所を備え給うた無限なるものの存在であります。

有限な物質であるこの大宇宙には、始まりがあつた！と賢明な科学者は、正しい推論の後に、こう結論しています。始まりがあつたということは、その一瞬間前には存在していなかつたということです。そしてだれも、なにもものも、自分自身を創造することはできません。

この大宇宙に始めあらしめたもの、そして大宇宙と共に、その中に住まい、すべてのものに存在を与えたもの、私たちは、それを天地万物の創造主、すなわち、神と呼ぶのです。

さと思わせるような安らかな気持ちです。それは、あなたを少しも卑屈にしないどころか、むしろ、ひざまずき手を合わせることに、あなた自身の尊厳を見出したような気持ちです。

けれど、そういう気持ちに不思議がられることは少しありません。なぜなら、それこそ、人間の正しい姿、ありのままの姿なのであり、そして、それが人間の最も高貴な姿なのだからです。太陽は確かに大きく輝かしく、大宇宙は更にはてしなくすばらしい。その宇宙から見れば、人間は真に小さなみじめな微々たる存在、いわば風にそよぐ葦に過ぎません。けれども、人間は大宇宙よりも、はるかに尊く、はるかに偉大なのです。なぜなら、パスカルが申しましたように、この葦は「考える」からですし、フランスの詩人ラマルチヌが歌いましたように、人間だけが考えて、見い出して、そして、神のみ前にひざまずいて、手を合わせることを知っているからです。天地万物の有限なる神秘のなぞを突き破って、人間だけが無限なるものに結びつくことができるからです。

皆様、以上三回にわたり、神の存在について語り続けて参りました。人間が、偏見と先入観とを投げ捨て、謙虚な赤裸な、そして驚くことを知る幼児のような気持ちになるなら、神を見出すことは、そんなにむづかしいことではないと思います。

さて、巨万の富を山と積み、位は人臣の限りを尽くし、肉欲の快楽のあらん限りを楽しみ尽く

してみても、いつもいつも心の底に感ずる冷たくうつろな空虚、私たちは、それが、人間全体が満たされていないからだと考えました。しあわせというものが、人間全体の満ち足りた充足感から来るものとすれば、ただ肉体という一部の面をいかに満たしてみても、それよりも、もっと大切な人間の魂の充足を忘れるなら、人間はしあわせであるわけはありません。大切なことは人間の魂に充足の生命を与えることでありましょう。

皆様、私たち人間は、さきほど申しましたように、ほんとうに小さな微々たる存在、六尺に満たぬこのからだです。けれども、人間の持つ魂は、有限なものであるものをもってしても満たすことができないほど、大きいのです。人間の魂を満たすことのできるものは、ただ一つ、無限なる存在だけなのです。六尺に満たぬこの人間が、ついに、無限なるものを以ってでなければ満たされぬほどに大きく作られているという、人間の宿命を、じっと謙虚に見つめようではありませんか？

では、また来週まで、皆様、さようなら。